

---

# 犯行予告日記

小松牧江

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

犯行予告日記

### 【コード】

N0075D

### 【作者名】

小松牧江

### 【あらすじ】

父子家庭で育った三つ子の中学生、一花、二葉、三菜。三人の名前で書かれた三つの日記は、ある目的で書かれたものだった。悲しく狂った、家族の物語。

## 第一章 一花の日記 一月二十四日(月)

三菜を殺そうと思います。あの子はいらない子です。

お父さんの娘は、私と三菜で充分です。三菜は昔から私たちとは、いえ、普通の子とは違っていました。『ちょっと変わった子』なんて、かなり好意的な評価です。『変な子』でも優しすぎるくらいです。『ダメな子』が一番近いかもしれません。部活も委員会もやらず、友達もいません。せめて勉強くらいはやりそうなものですが、それすらできないのです。何の趣味も特技もなく、いつも独りでよくわからない本を読んでばかりいます。

これで性格が良ければまだ可愛げがあるのですが、それが最悪です。私は姉として、何度も三菜に話しかけています。でもその度に死んだ魚のような目を泳がしながら、「……別に……」と答えるだけです。

こんな妹いららない。前からずっと思っていました。それでも一応血を分けた姉妹だし、私は優しいお姉ちゃんです。何もやらない、何もできないダメな妹でも、精一杯の愛情を注いできました。そろそろそれも限界です。いや、限界なんてとつくに超えています。それでもこれまでは、なんとか共存できていました。今日の出来事が無ければ、これからも姉妹として一緒に生きていくことくらいはできたかもしれませぬ。

今からほんの三十分前のことです。

私はお風呂を済ませて、リビングで鏡の前でドライヤーを当てていました。クセの無いサラサラの長い髪。私の密かな自慢です。下ろすと胸の近くまである髪を、少し得意気に乾かしていると、ふと気配を感じました。私がドライヤーを止め、顔を上げると、三菜の顔が視界に入りました。せっかくいい気分だったのに少し興ざめで

した。それでも私は優しい姉として精一杯の笑顔で、  
「どうしたの三菜？ そんなトコでこっちをじーっと見て。ひよっ  
としてお姉ちゃん髪の毛に見とれてた？ 三菜だってキレイな髪  
じゃない」

と、話しかけました。三菜は目をそむけ、

「…………新聞を読みに来ただけ…………」

とつぶやき、私のほうに目を向けました。私のはつとして足元を  
見ると、足元に新聞がありました。慌てて足をどけて、三菜に謝り  
ながら新聞を手渡すと、三菜は、

「…………自意識過剰…………」

と言いながら、新聞を両手で抱えてリビングを出て行きました。

私そっくりの長い髪を見送りながら、私は小さくため息をつき、  
気を取り直して鏡に目を戻して、そうしてがくぜんとしました。

髪を下ろした私の顔は、いつも私を不愉快にさせる張本人、三菜  
と同じ顔だったのです。

当然といえば当然、私たちは実の姉妹、それも同じ年の同じ日に  
生まれています。

いままで当たり前前に認識していたハズなのに、急に恥ずかしくな  
ってきました。出来の悪い妹を持っていることではなく、私と同じ  
顔をした出来の悪い女が、この世に存在することが、とてつもなく  
恥ずかしいことに思えてきたのです。同じ顔をしていても、二葉に  
はこんな感情は抱きません。あの子はいつも元気だし、いつもたく  
さんの友達と遊んでいます。ちょっとわがままなところもあるけど、  
私にとってかわいい妹です。

でも三菜は違う。外見だけは一緒だけど、私と二葉の不要なパー  
ツをかき集めて無理やり作ったかのような不良品。そんな産業廃棄  
物は、すぐにでも捨ててしまったほうがよいのです。世のためにも、  
二葉のためにも、私のためにも。

だから私は決心しました。三菜を殺そうと。

でも、今すぐ三菜の部屋に行つて首を絞めるわけにもいきません。犯人が私だと分かったら、私もいらぬ子になってしまいます。不要なのは三菜だけなのだから、三菜だけいなくなればいい。三菜がいなくなることで、何も変わらないというのが良いのです。でもどうやって？ それって、いわゆる完全犯罪ってやつを成立させないためなのでしょう。

まあいいや、あせることはない。いい手が思いつくまで、三菜にはわずかな余生を楽しんでもらうことにします。もともと、友達の一人もいないあの子に楽しみなんてあるとは思えないけど。

それまで、この日記を書くことにします。三菜が、どれだけ必要のない存在かをつづつた日記。今日から、三菜が消えるまでの短い日記。

## 第一章 一花の日記 一月二十五日(火)

今日は、三菜が私の部屋にやってきました。すごく珍しいことです。

ノックだけしていつまでたつても入ってこないの、私は、わざわざ席を立て、自分の部屋の扉を三菜のために開けてやらなければなりませんでした。

ドアを開けると、見慣れた自分と同じ顔がありました。私の劣化版であるそいつは、うつむいて黙って突っ立っています。数学の問題集を両手で胸に押し付けています。昨日も新聞をそうやって持っていたけど、両手で物を抱えるくせはなんとかならないのか。私と同じ顔で、そういうキモイ行動をしないで欲しいです。

「いいよ、私に解るところなら教えてあがるから、早く入ってきなさい。廊下は寒いんだから」

大体状況は把握できたので、私はそう言って、笑顔で三菜を招き入れました。そういえば、三菜は受験生でした。私も本来そうなのですが、この前推薦入試で合格しました。そのためにやっていたわけではないけど、生徒会に参加してよかったと思います。

私は、部屋の隅に置いてあるテーブルを持ち出して、三菜と向かい合って座りました。

三菜の問題集には、山のようにふせんが貼ってありました。

まさか、これを全部説明しなきゃいけないのか。

そう思いつつ、優しいお姉ちゃんである私は、一問一問丁寧に説明してあげました。私は時折、「わかった?」と言いながら三菜を見上げましたが、ずっと解ったような解らないような、聞いているのかすら怪しい無表情のままでした。

それでも根気よく説明を続けましたが、二十問近くは説明したでしょうが、さすがに疲れてきたので、

「三葉、ちょっと休憩しようか」

と、提案しました。すると、あるうことが、

「……今日はもういい……」

と、言うが早いか問題集とノートをたたんで出て行ってしまいました。例によって、荷物を両手で胸に押し付けながら。

私は小さくため息をついて、テーブルを片付けました。

私の可哀想な妹、好き勝手できるのもあと少しよ。

## 第一章 一花の日記 一月二十六日(水)

今日は、とても嬉しいことがありました。

ずっと海外で働いているお父さんが帰ってきたのです。お父さんはいつも突然帰ってきます。

あらかじめ電話でもしてくれれば、ちゃんと歓迎の準備をしておくのに。

お父さんにそう言うと、笑っていました。私たちがびっくりする顔が見たいから、わざとそうするのだそうです。ちよつと悔しいけど、帰ってきてくれるとやっぱ嬉しいので、私は急いで買物に行つて、精一杯のご馳走を作りました。そして、久しぶりに家族揃つて食卓を囲みました。

お父さんに私に二葉、そして三葉。

お父さんは、我先に言いたいことを話す、私と二葉の話を楽しそうに聞いてくれました。私が、学校推薦で地元有数の進学校に入つたこともすごく喜んでくれました。照れ隠しに、メールで話したから知つてたでしょ、と言うと、一花の顔を見ながら聞くと二倍嬉しいんだよ、と言われて余計照れてしまいました。二葉も、嬉しそうに自分のことを話していました。二葉は、得意のバスケットボールで、スポーツ推薦枠で進学ができるようです。しかも全国大会のときにプロのスカウトに見初められ、将来プロ入りが内定しているとも言っていました。女子バスケットにプロつてあつたっけ？ と私がつつこむと、バレたか、と言って舌を出して笑いました。そうして三人で笑いました。

私にとって、楽しいひとときでした。

会話が一瞬途切れた隙に、お父さんが口を開きました。

「三葉はどうだ、元気でやってるか？」

私のついさっきまでの楽しい気持ち、急速冷凍されていきまし

た。

「……別に……普通だよ……」

三菜は顔も上げずに答えました。

「そうか、お姉ちゃん二人は受験勉強がないからな。一人で勉強するのも寂しいだろうが、頑張れよ。父さんは応援しか出来ないけどな」

お父さん、三菜になんて気を使わなくていいんだよ。

「……うん……」

三菜のくせに、なにしおらしくしてんの？

「三菜、本当に塾とか行かなくていいのか？ 今からじゃ遅いかもしれんが、直前講習とかあるんだろ。そのくらいなら出してやれるんだぞ。父さん、こう見えてもけっこう稼いでるぞ」

お父さん、私も二葉もお父さんの負担を少しでも減らすうと思つて頑張つたんだよ。なのになんで、一番頑張つてない三菜を気遣うの？

「……平気……」

平気じゃないでしょ、あんたこの時期に問題集解らないとこだらけでしょ。あの程度じゃ、変な私立にしか受からないわよ。「そうか、三菜は優しいな。一花も二葉もしっかりしてるから安心だけど、三菜は少しあぶなっかしいとことがあるから、父さん少し心配だったんだ。でも、大丈夫みたいだな。いい子に育ってくれた」

お父さん、三菜が心配なんだね。三菜が可哀想だからそんなに気を遣うんだね。安心して、お父さん。もうすぐその不必要な気遣いは終わりにしてあげる。

私が、終わらせる。

## 第一章 一花の日記 一月二十七日（木）

お父さんは、明日には帰ってしまうそうです。

私は、学校を休んでお父さんと一日中一緒にいるつもりでした。

今朝、四人で朝食を食べているときにそれを伝えると、

「学校をサボったらだめだよ」

と、あっさり断られてしまいました。私は食い下がりましたが、

「夕飯、楽しみにしてる」

と、笑顔で言われて、何も言えなくなりました。その時点で、私の頭の中は、お父さんに喜んでもらえるメニューを全力で検索していたからです。

そんなことばかり考えていたからでしょうか、それともお父さんとの朝食がよほど楽しかったのでしょうか。気がつくと、いつもよりかなり時間が経っていました。

私は、お茶を飲み干すと、大急ぎで登校の準備を始めました。洗い場に散らかされた食器が目に入りましたが、もう朝食の片づけをしている時間はありません。お父さんに見送られながら、急いで家を飛び出しました。

私は、とても恥ずかしい思いでした。本当はもっとしっかりした私を見て欲しかったのに。これじゃあ、料理も掃除もしない普通の女子中学生と変わりありません。

息を切らせて肩を落とすという、我ながら器用な真似をしながら玄関を出ると、その普通の女子中学生二人が待っていました。私の妹、二葉と三菜。

二葉は、「ねえちゃん、おそーい」などと勝手なことを言っていますが、不思議と腹は立ちません。二葉の明るさは、二人のお母さん代わりでもある私にとって、ずいぶんと助けられているからでしょう。

問題は、もう一人の妹。

三葉は、私の姿を横目で確認すると、すたすたと一人で歩き出しました。彼女は、人をいらつかせることが得意なようです。しかし、優しいお母さん代わりであると同時に、優しいお姉ちゃんでもある私は、

「三葉、待つてよー」

と言いながら、横に並びました。二葉も私の横に追いつき、いつものように三人での登校が始まりました。

三人で登校するといっても、それは途中までの話です。

学校が近づくにつれて、同じ制服で同じ方向へ向かう中学生が増えていきます。

二葉は、バスケット部の友達を見つけると、私の隣を飛び出して、さつさと挨拶セクハラに行っていました。

私は、二葉が友達とじゃれあっているのを眺めながら、しばらく三葉と肩を並べて歩いていました。すると、さっきまで二葉がいた場所に、私のクラスメイトが入ってきました。

「おはよう、一花」

「おはよう」

私が友人に挨拶を返すと同時に、隣の三葉の歩幅が大きくなりました。そうして、一人で行ってしまいました。

「…相変わらずだね、三葉ちゃん。私、嫌われてるのかな？」

（いや、ただ根暗でウザいだけよ）

気のいい友人の気遣いに、私はこう答えかけて、

「三葉は照れ屋だからね、いい年して。家ではいい子なんだけど」と、言いました。

私の友人にまで気を遣わせて、本当に救いようの無い子です。早く始末しないと。

「黙って並んでれば、誰が誰だか分かんないんだけどね」。ここま  
で違いがあるとは。二葉ちゃんなんて輪をかけて別人だし」

その友人のセリフは、私たちが幼い頃から幾度となく聞かされたありふれたものでした。しかし、三菜への殺意で頭がいっぱいになっていたその時の私の頭の中に、あるアイデアがひらめきました。

黙っていれば、誰が誰だか分からない。

これは使えるかも。二葉に協力してもらえば、簡単に事が運びそうです。殺人に協力するのを承諾してくれるかは少し不安ですが、三菜がウザいのはあの子も一緒でしょう、きっと乗ってくれるはずです。二葉の入試が終わり次第、相談することにします。

そうだ、今日の夕食も昨日以上に頑張って作りました。お父さんは昨日と同じ笑顔でした。

## 第一章 一花の日記 三月二十四日（木）

「悪いことはできない」ってよく言われます。

これは、「悪いこと」をしようとするど、どこかから抑止力が働いて、結果として実行できなかつたり、実行しても見つかつてしまい、法律で裁かれてしまつたりすることだと思ひます。だから、「良いこと」をしようとするれば、「悪いこと」をしようとした時とは逆に、何かの力が後押ししてくれて、楽に物事が運ぶと言えます。

これが真実だとすれば、私のしようとしていたこと、したことは「良いこと」に違ひありません。これからは気苦労なく、楽しく新しい高校生活を送れることでしょう。

三菜は死にました。私の予定よりも早く。

あの日（前回書いた日記の次の日）、お父さんは、朝早くの飛行機で仕事に戻るために、タクシーを呼んでいました。

私は、今日だけは学校を休んでお父さんを見送りたい、と言ひました。

お父さんは、あの日はあっさりと承諾してくれました。

せつかくだから、思ひ切りドラマチックな別れ方をしよう。お父さんは、突然帰つてきて私たちを驚かすなど、ドラマのような展開が好きなようです。

そこで私は、妹二人にも声をかけました。残念ながら、二葉はあの日が推薦入試でした。私は制服に着替え、三菜と共にタクシーに乗り込みました。

空港までの車内で、お父さんはずっと三菜の受験の心配ばかりしてました。「駄目な子ほどかわいい」とは言ひますが、お父さんもそんな感情を持つてるのでしょうか。そんなことは無いはずで

す。お父さんは優しいから、三菜にかまっているだけ。本当はいいに越したことはないに違いありません。

いつもならここで、私は怒りに震え、三菜への殺意を再確認するところですが、あの日の私は、自分でも不思議なくらい落ち着いていました。二葉の進路が決まり次第、三菜を消す計画を持ちかけ、実行する決心がついていたからでしょう。お父さんにとって、今日が三菜とのお別れの日なのです。

もう少してこの世から消える人間の将来を心配するお父さんは、少し滑稽でしたが、何も知らないのだから仕方ありません。

もう少しだけ待ってて、お父さん。その不安材料はすぐに消滅するから。

そんなことを考えて、私は黙って座っていました。

「良いこと」をしようとした私を後押ししてくれたのは、三菜自身でした。

お父さんを見送った後、そのほうが安いという理由で、帰りを電車にしようと私に提案したのです。空港からは、駅までのバスも出ているし、今日は学校に行く気も無かったので、私がその提案を断る理由は特にありませんでした。

あの頃の私は、三菜と二人きりになると、彼女を始末する計画ばかりが頭に浮かんできました。あの日もそうでした。いや、あの日はすでに計画が練ってあったので、三菜と当たり障りの無い会話をしながら（もちろん、私が一方的に話すだけで、気の無いあいづちしか返ってきませんでした）、目の前の私と同じ顔をした不愉快な存在がいなくなった、平和な世界を想像していました。

電車の中でそうしているうちに、事故が起きました。

最大手鉄道会社がたまにやらかしてくれる、大脱線事故です。

何でも、高架線から平地へ進む、ゆるやかな下り坂を走っていて、

その途中にあるカーブを曲がりきれずに脱線してしまったとのこと  
です。テレビでは、評論家みたいな人がいろいろ言っていました。  
運転手の労働条件が厳しくて居眠りをしていたのだとか、子どもが  
自転車で猛スピードで下り坂を走って遊んでいたのと変わらないか  
ら、もつと運転の指導をしつかりすべきだとか、根拠の無い憶測を  
もつともらしく主張していました。死者には、運転手の人も入って  
いたので真相は分かりません。

私は、数少ない生き残りの一人だったので、病院のベッドの上で、  
マスコミの人たちの取材を受けましたが、ほとんどまともに答えら  
れませんでした。みんな、私のはつきりしない受け答えにイライラ  
していたようでしたが、医者の方が、事故のショックで記憶があい  
まいなのでしょう、と言うと、一応納得してくれたようでした。

それは、私にとって好都合でした。  
それに、私が事故の記憶があいまいなのは本当でした。さつき書  
いたように、三菜のことしか頭になかったから。

気がついたときには、電車は止まっていました。  
私は、状況を確認しました。

電車が止まっていて、窓がたくさん割れていて、窓から見える景  
色は見覚えがなくて、電車の中が、駅員の人が掃除をさぼったのか  
と思えるほど汚れて、散らかっていました。多くの人が寝ていまし  
た。みんな真っ黒に汚れていました。割れた窓に下半身だけひっか  
かりながら寝ている人もいました。金網の上で、上半身だけ寝てい  
る人もいました。そして私は、誰かに抱きかかえられながら、気を  
失っていたようです。

これだけ確認してから、私は何が起こったのかまるで分からなか  
ったけれど、何をすべきかは理解していました。

体中が痛くて、目もかすんできたけれど、私は、私を抱いたまま  
固まっているモノを引きはがしました。私が床に背中をつけて、そ

いつが覆いかぶさった状態だったので、力まかせにどかすと、それは床に後頭部をぶつけました。仰向けになったそれは、予想通り私と同じ顔をして、同じ制服を着ていました。頭をぶつけたおかげか、それは少し体をよじってから、うつすらと目を開けました。

「あ……………無事だった？……………」

私をかばったせいも、私よりも重傷らしく、弱々しい声でした。普通の中学生の私には、医学の知識なんてまるで無いけれど、命に別状はなさそうでした。抱き合うことで、お互いをかばい合う形になっていたのでしょうか。私は痛みをこらえて立ち上がり、割れた窓の破片を手に取り、そいつの首に思い切り突き刺しました。

そうして、かねてからの計画を実行し終わると、私は力尽きたように、気づいたときには病院のベッドの上でした。

これで、私の目標は遂げられました。もうこの日記を書く必要は無いでしょう。三菜殺害のモチベーションを上げるために書いていた日記だから。

不要な三菜はもういない。世の中は、少しだけよくなったと思います。

そうだ、せっかくだから最後にお父さんのことを書いておきます。お父さんは、事故の被害者に私たちが含まれていると知ると、すぐに戻ってきてくれたようでした。

私の病室へ駆け込んでくると、お父さんはしばらく言葉を失っていました。私は、精一杯の元気で、

「…………お父さん、ごめんね。おわびに、次に帰ってきたときは、もっとおいしい料理を作るから……………」

と言うと、お父さんはいつもの笑顔で、

「ああ、無事でよかった。…一花」と、言ってくれました。

## 第二章 二葉の日記 六月一日(水)

一花を殺そうと思う。あいつむかつくから。

あいつといるとホントに息がつまる。中学のときは、あんまり気づかなかつたけど、あいつはよく家にいる。

私たちは、二人暮しだ。お父さんはもうずっと海外で仕事してるし、お母さんはいない。だから、家事は自分たちでやらなきゃダメなわけだけど、それを一手に引き受けてるのが一花だ。私はそういうのは苦手だし。

だから確かに、私は一花に感謝しなけりゃダメだし、実際感謝してる。でも、それだけでいいはずだ。

私が必要としていて、感謝すべきなのは、『みんなの家みたいに、お母さんがやってくれる家事を、お母さんがいない私たちの家で代わりにやってくれる双子の姉の一花』であって、『お母さん代わりにの姉』ではない。同い年のくせに、母親気取りでホントムカツク。

今日のことだ。

私は今日部活の後、テンションが上がっていたので、仲のいいメイツと街へ遊びに行っていた。適当にぶらついた後、まだ話し足りなかつたので、ファミレスに入った。そこで夕食を済ませて、家に帰ると一花が居間にいた。

「お帰り、二葉。遅かったね、どうしたの？」

私は簡単に説明し、夕食を済ませたことも言った。

「えー、そうならそうと、連絡くれればいいのに。二葉の分も作って待ってたんだよ」

待ってる頼んだ覚えは無いが、私が悪いのは間違いないので、謝ろうとした。私が頭をかきながら「ゴメン、姉ちゃん」と、口を動かそうとした寸前に、

「はあ、二葉もバスケットと遊びばかりじゃなくて、少しは勉強とかし

たら？」

同い年の女にこう言われた。

私は頭が内と外、両方から押さえつけられるような感じがした。そう言えば昔友達が、

「親ってさー、なんかちょーうざいんだよ。宿題やってさ、ちょっと休憩ーって思って、ベッドでマンガ読み始めた瞬間に、勝手に部屋入ってきて、マンガばかり読んでないで少しは勉強しなさい、とかほざくの。もうやる気失くすっつーの」

とか言ってたのを思い出した。

この時の私も、この友達と似たような感情だったのかもしれない。こっちが素直に謝ろうとした時に、うざいこと言われたらそりゃムカつくっての。

しかもさら夕子の悪いことに、私の相手は親ではなく、私よりほんの二、三分早く生まれただけの親気取りの姉だ。私は、目の前の私と同じ顔をひっぱたいてやりたい衝動を、元々は私が悪いんだと自分に言い聞かせることで、なんとか抑えた。黙って部屋に戻ろうとすると、後ろから、小さなため息が聞こえてきて、余計私を苛立たせた。

そういうわけで、私は、一花をこの世から消す決心をした。

あんな青白い女一人殺す方法なんて、いくらでもあるだろう。

ひとつ問題がある。殺人は罪だ。私が捕まって、この貴重な十代を無駄に過ごすわけにはいかない。なんとかよい方法を思いつかないと。明日もきつと、一花はうざい。このままじゃ、そのうち私の頭は、イライラで破裂してしまう。

そうだ、今日からこの日記、毎日書いていこう。今、私は結構落ち着いてる。イライラが溜まってても、こうして文章にしているときは、少しは冷静になれるみたい。明日から、そういう落ち着いた頭で、いい殺人方法を考えよう。

今日は眠いからもう寝よ。お風呂は朝入ればいいや。

## 第二章 二葉の日記 六月二日(木)

冷静になった頭で考えてみた。

昨日はどうかしてたのかも。

姉ちゃんは、よくやってくれてる。お父さんは海外で、お母さんもないのに、私が、ちゃんと両親のいる他の友達と同じように好き放題遊べるのは、姉ちゃんがいるおかげだ。

姉ちゃんは、毎日私よりも一時間も早起きして、朝ごはんとお昼の弁当まで作ってくれる。その間に洗濯機を回し、私が学校に行くのを見送った後、洗濯物を干してから学校に行くらしい。放課後は、私がバスケットをしてる間に、友達とおしゃべりもそこに、スーパーで買い物をし、家に帰る。そして、洗濯物を取り込んで、エプロンをつけて、二人分の夕食を作る。家がいつもキレイなのも、姉ちゃんが休日に掃除してくれてるからだ。

姉ちゃん一人にここまでやらせておいて、私はなんでイライラしてたんだろう。ここまで一人で負担してるんだから、イヤミの一つも言いたくなるさ。

悪いのは、私のほうだった。

人間は、歩み寄りが必要だ。自分のことばかり考えていては、昨日の私みたいにバカなことを考えてしまう。

姉ちゃんに謝ろう。

そうして、いままでどおり二人で仲良く暮らしていこう。

休日に私が暇だったら、二人で街に遊びに行こう。

お父さんが帰ってきたら、二人で大歓迎してあげよう。

私がここまで考えて出した結論は、やっぱり一花殺す、だった。

今日のことだ。

私は、部活が終わると、友達の誘いを断ってダッシュで家に帰った。帰りの電車の中で、一花にメールもしておいた。

『昨日はゴメン、今日は早く帰るから夕ごはんよろしくね』  
返信は来なかった。夕食の準備とかで忙しいのだろうと思った。  
私は、一花に言うつもりだった言葉を頭の中で繰り返しながら、  
帰り道を急いだ。

「ただいま」と言つて、居間のドアを開けると、一人で何かを食べ  
ている一花が見えた。食卓には一人分しかないように見えた。おや  
つ…のわけがない。時計の針は、七時をとくに回っていた。

「お帰り、二葉」

私をちら見してからそう言つと、一花は食事に戻った。

いきなり予定を狂わされた私は、しばらくドアノブを持ったまま  
立ち尽くしていた。

「二葉は今日何食べたの？」

そう言われて、私は我に返った。

やっぱり怒ってるんだ、と思った。

私は、こつそりと深呼吸してから言つた。

「ゴメン、メール送っただけだけど気づかなかつた？」

「全然。ケータイ部屋に置いたままだから」

「もー、ケータイの意味ないじゃん。それでさ、姉ちゃんに話があ  
るんだけど。あ、ご飯の後でいいよ」

「今でいいよ。そんなにかからないでしょう？」

私は少し考えた。今言つてもいいのか。

怒ってる相手に（特に、相手に非が少ない場合）、謝るときは、  
二段階に謝るのが有効なことが多い。とりあえずメールで謝つて、  
相手がすぐには許してくれなくても、少し時間をおけば落ち着いて  
いる。そこで改めて直接謝れば、まともな相手なら大抵は自分にも  
非があつたことを認めてくれ、仲直りできる。

だから今回、メールを無視されたのは痛かつた。まさかイマドキ、  
ケータイを携帯してない高校生がいるとは。

それでも、まあ大丈夫だろ、と思つた。一花は昔から優しかった。

去年の事故で、記憶があいまいになってからは、なんとなく雰囲気が変わったが、一花の優しさは変わらずにあった。だから、ちゃんと謝ればきつと許してくれる。

私は、今日の帰り道に何度も頭の中で練習した謝罪の言葉を、もう一度確認した。

（姉ちゃん、昨日はホントごめん。これからは、遅くなるときはメーイルするから。あとさ、私に料理、教えてくれない？ちょっとは姉ちゃんを手伝わなきゃと思って）

あとは言葉にするだけだった。

一花は、目の前に突っ立ってる私を見ようとせせず、一人で食事を続けていた。私はとりあえず、注意を引くために、「姉ちゃん」と言おうとした。『ねえちゃん』の『ん』くらいは発音したと思う。

その瞬間、一花が突然頭を上げ、私をにらみつけた。私と同じ形をした瞳からは、明らかな敵意を感じた。私は『ん』だけ発音したまま、口が動かさなかった。代わりに、私と同じ形の口が、言葉を吐き出した。

「二葉はいいよね、そうやって好きなこととして遊んでいればいいんだから」

昨日と同じだった。私が一花の気持ちを考えて、フォローをしようとする直前に、まるで私の謝罪を阻止したいかのようなタイミングで、平気で私を傷つけることを言う。

昨日と同じイライラが、私の頭をいっぱいにした。それにかまわず、一花の口はまだ動いていた。

「別に、少しは手伝ってよ、なんて言わないよ。適材適所って言葉があるでしょう。二葉は、好きなことだけやる。私は、二葉のために働く。それでいいと思ってるから」

私は、黙って部屋に戻った。

自分が一花に言おうとしてたことなんて、すっかり忘れてしまっ

ていた。代わりに思い出したのは、一花は死んだほうがいい、ということだった。

あ、夕食食べてないからお腹へってるんだった。コンビニでも行こう。

## 第二章 二葉の日記 六月三日（金）

冷静になった頭で、昨日とおとこの日記を読み返してみた。少し、心に引つかかることがあったからだ。

私はなんで、一花を殺そうなんて、思ってるのだろう。

『母親気取りで、人の気持ちを考えない一花がうざい』

これは、殺人の動機としては十分だ。ただ、なぜ最近になって、こんな感情が私に目覚めたのか、引つかかっていた。

今まで我慢してたけど、最近になって、キレかけてる？

いや、違う。

昔は、一花のことは本当に好きだった。母親気取りだなんて、考えたことすらなかった。誰よりも優しく、頼りになる姉ちゃんだった。

じゃあ、なんでだ？

昨日の日記にヒントがあった。

『去年の事故で、記憶があいまいになってから、なんとなく雰囲気が変わった』

これだ。

そう言えばあの事故の後、姉ちゃんに違和感を感じるようになった。

笑顔に影が差しているように見えることもあった。それどころか、思いついたくもないあいつとダブって見えることすらあった。その小さな違和感が、少しずつ、少しずつ私の殺意を育てていったのかもしれない。

一花が変わった原因は、あの鉄道事故で間違いないだろう。じゃあ、どう変わったのか。日記を読み返すと、一花のセリフがある。

『二葉はいいよね、そうやって好きなこととして遊んでればいいんだから』

読み直すと、またイライラしてきた。イヤミったらしいセリフだ。

でも落ち着いて考えると、これはただのイヤじゃなくて、本当に私をうらやましがってるとも思える。おとこの日記にも、

『二葉もバスケット遊びばかりじゃなくて…』

と、言っていたと書いてある。

これらのセリフから、簡単に想像できることがある。

今の一花は、友達がいらない。そして、私をねたんでいる。

間違いないだろう。そうじゃなきゃ、ケータイをずっと部屋に置いたままにする奴なんて、いるはずがない。友達がいらないから、普通の高校生活を送ってる私がねたましいんだ。

そして、「友達がいらないのは、家に帰って二葉の面倒を見るため」とか、無理やり考えて、自分をなくさめてるんだ。だから、昨日私が謝って、歩み寄ろうとしたのを拒否したんだ。私が家事を手伝えれば、友達がいらないことの、自分への言い訳ができなくなるから。

なんて、みじめな姉だろう。

これからも自分を保つために、私にイヤミを言って、一人で家事をしていい気になってるんだ。

やっと分かった。

こんなかわいそうな子が、私と同じ顔をして、街を歩いているなんて我慢できない。

これが、私が一花を殺す本当の動機だ。私が平和に暮らすためだけじゃない。事故の後遺症で、社会に適應できなくなった、かわいそうな子を楽しむためだ。

実行は、早いほうがいい。幸い、明日は土曜日だ。

## 第二章 二葉の日記 六月四日(土)

文字を書く手が震える。

まだ興奮がおさまってない。

今日は、あった出来事だけをさっさと書いてしまおう。

この日記を、キレイな形で終わらせるために。

私は、一花が作った朝食を食べながら、

「姉ちゃん、今日ヒマだったら街に遊びに行かない？」

と、提案した。

ダメな一花は、首を少し傾けて、キョトンとしながら言った。

「どうしたの、急に？ 部活があるんじゃないの？」

「まあ、たまにはいいじゃん。高校に入ってから、ぜんぜん姉ちゃんと遊んでないし」

「そっか、じゃあたまにはいいかな。でも、お掃除とお洗濯してからだから、お昼頃になっちゃうけど」

「それでいいじゃん。ついでに、ランチも外に行こうよ。久しぶりにさ」

「ふふ、なんか二葉、今日はいつも以上に元気ね。じゃあ、早く終わらせるから待ってて」

「いや、手伝うよ。いつも姉ちゃんにやってもらってばっかで悪いからさ。これからは、少しずつでも姉ちゃんを助けていかないと、って思ってたんだ」

「…そう。ありがとう。じゃあ、とりあえず外の洗濯物を取り込むの手伝ってくれる？」

「ラジャ」

私たちは二人で、二階のベランダに行くために、階段を上った。

私が先に進み、そいつはすぐ後ろを歩いた。踊り場まで登ったとき、私はすぐさま振り向いた。

タイミングは、我ながらバツチりだった。

そいつは、ちょうど、片足を踊り場へ足を乗せたところだった。そいつは、突然振り向いた私に、少し驚いた顔をしていた。

私は、踊り場に寄せたほうの足の、すね辺りを思いつき蹴ってやった。その足は、階段を一段下り、そのために、体はバランスを崩して前に倒れた。

鈍い音がした。

そいつの頭が、階段の角にぶつかった音だった。

そのあとは、簡単だった。

そいつは、一段ずつ、階段を降りていった。片足を交互に出す、という一般的な方法ではなく、一つしかない頭を使っていた。

一段ずつ。

一段ずつ。

一段ずつ。

一段ずつ。

一階まで下りきったそいつは、もう全く動かなくなっていた。

私は、この一部始終を、蹴りを入れた体勢のまま見下ろしていた。一瞬の出来事のはずだが、私には、ひどく長い時間に感じられた。

だから、声をかけられるまで、その人が、私を見上げていることに気づかなかった。

その人は、自分のもう一人の娘が、足元に転がってるのに、いつもの笑顔を崩していなかった。そうして、私に言った。

「下着見えてるぞ、三菜」

お父さんは、いつも突然帰ってくるのだった。

### 第三章 三菜の日記 六月十一日(土)

もう、誰も殺さなくていいのだ。

では、私は、何故未だ日記を書いているのだろうか？

決まっている。前提が間違っているのだ。

殺人の士気を高めるために日記を書くなんて、普通ではない。

普通の日記は、その日にあったことや、思ったことを書くものだから、内容は、どんなことでもかまわない。読者は、自分だけなのだから、故に、普通の高校生である私は、今日の出来事をこれから書いていこうと思う。

今日は、お父さんに、二つの日記を読んでもらった。

もっと早く読んでもらいたかったのだが、二葉の死後の後始末で忙しかったため、一週間も経ってしまった。お父さんは今、長かった海外勤務を終えて、家から会社に通っている。

私は、お父さんの書斎をノックして、ドアの前で待った。二冊の日記を両手で抱えていた。お父さんは、ドアを開けて、私を招き入れてくれた。

「どうした、三菜？」

「……これ、読んで……」

私は、日記を差し出した。両手を思いきり伸ばして、顔も伏せていたので、昔の漫画のラブレターを渡すシーンに見えたかもしれない。

お父さんは、黙って受け取り、黙って読み始めた。

その間、私は、恥ずかしさと緊張で、ずっとうつぶむいて、正座して待っていた。

私の短い二つの日記は、一花お姉ちゃんと二葉お姉ちゃんをうら

やんだ、見苦しい日記だ。

誰にでも優しくして、何でもできた一花お姉ちゃんは、私にも優しくかった。私ごとき、無視したり、馬鹿にされるのが当然なのに、本当に優しくかった。私は、その優しさに、裏があるとしか思えなかった。

いや、思わなければならなかった。

同じ日に、同じ顔で生まれ、同じ人に育てられたはずなのに、私と一花お姉ちゃんは全くの別人だった。いつも薄暗い部屋で、暗いことを考えている私と違って、一花お姉ちゃんはあまりにも輝いていた。

だから私は、お姉ちゃんの心の中だけは、私と同じく真つ暗に違いないと考えないと、耐えられなかった。実は、一花お姉ちゃんは、根暗な私が大嫌いで、私を殺そうと考えている。殺される前にこちらが殺してやろう。

そう思い込むために、「一花の日記」を書いた。

一花お姉ちゃんを殺した後、お姉ちゃんになりすまそうと思ったのは、思いつきだった。せつかく殺人という、大それたことをしたのだから、どうせなら人生を大きく変えてやろうと思ったからだ。

私は、お姉ちゃんになるために、人生でいちばん努力した。『お姉ちゃん』合格した進学校についていくために、必死で勉強した。お料理も、お姉ちゃんの味を思い出しながら、練習を重ねた。二葉お姉ちゃんに対する接し方も、お姉ちゃんらしくした。

そうまでしても、私は一花お姉ちゃんにはなれなかった。どんなに真似をしても、私は根暗で孤独な三菜だった。その証拠に、高校で私は一人だった。中学時代の『一花お姉ちゃん』友達は、『私の』友達ではなくなってしまった。

そうして、私はまた、不安定になり始めた。

三菜であったとき以上に、一花を演じながらの孤独な生活は苦しかった。

心の安定を求めて、私は、矛先を二葉お姉ちゃんに向けた。

いつも明るくて、元気いっぱいの一葉お姉ちゃんは、優しいけど少し控えめな一花お姉ちゃんを実は毛嫌いしている。そう思い込もうとしたが、その設定は少し無理があるように思えた。そこで、一花を演じる『私』を嫌っているということにした。

そうして、そう思い込むために、『二葉の日記』を書いた。

二葉お姉ちゃんを殺したあと、二葉お姉ちゃんになり変わるつもりはなかった。

どんなに真似しても、中身は変えられないことは、一花お姉ちゃんと入れ替わったときに、分かっていた。

「三菜、読み終わったよ」

「……あ……うん……」

私は緊張しながらも、自分が殺した二人のお姉ちゃんのことを考えていたので、お父さんが日記を返してきたのに一瞬気づかなかった。

「……どうだった?……」

「なかなか新鮮でよかったよ。他人が考えてると思ったことを、他人視点で書くなんで、珍しいんじゃないのか?」

「……そうじゃなくて……」

お父さんの軽い反応に、私はいつも以上に言葉を詰まらせたが、なんとか続きを言った。

「……私、二葉お姉ちゃんだけじゃなくて……一花お姉ちゃんも殺したんだよ?……あの事故のとき、お姉ちゃんも生きてた……。……もし、あの事故がなくても、いつか殺して入れ替わるつもりだった……」

「三菜」

突然名前を呼ばれて、私は、驚いて顔を上げた。お父さんは、普段からは想像もできないくらい、真剣な顔をしていた。

「三菜も知っているとおおり、母さんはお前たち三人を生んで、すぐに死んでしまった。父さんは、母さんの分までこの娘たちを愛する

ことを固く誓った。

だが、同時にこうも思った。

この三人の中に、母さんの生まれ変わりがいるんじゃないか、つてな。バカな考えだとは思ったが、喜びと大きな悲しみが、同時に心を支配していた父さんは、そう考えざるをえなかった。そう考えなければ、狂ってしまいそうだった」

父さんは、一度言葉を切った。私は、黙って続きを待った。

「三菜たちが幼い頃は、誰が母さんの生まれ変わりが分からなかったよ。三人でくるくる回って、誰が誰か当ててみてー、なんて言われたこともあったな。その頃は、みんな一緒だった。父さんは、三人の娘を公平に愛していた」

私は、何を言っただよいか分からず、正座したまま、こぶしをにぎって、黙っていた。お父さんは、いつの間にかいつもの笑顔に戻っていた。

「三人は、外見こそ全く同じだったが、成長していくにつれて、性格に少しずつ違いが表れた。父さんは、同じように接していたから、原因はわからないけどな。」

一花はすっかりものに、二葉は元気いっぱいに育ってくれた。もちろん二人とも大好きだったよ。

でも、すでに父さんは、別の一人に心を奪われていたんだ。母さんを見つけてしまったんだ。それが、三菜だ」

お父さんは、そう言って、私の目を見据えた。私は、自分の目頭が熱くなっているのに気づいた。

「母さんは、いつも無口で、大人しかった。そして、暇さえあれば、いつも一人で本を読んでいた。」

出会いは省くけど、父さんは、そんな母さんが気になって、ちょっかきを出すようになったんだ。最初は、本当に聞こえていないのか、ってくらい無反応だったけど、少しずつ返事をしてくれるようになった。表情は、ほとんど変わらなかったけどな。

結婚を申し込んだ時も、無表情だったよ。ただ、うなずいてくれ

た。父さんは、そんな母さんが大好きだった」

もう十分だった。

涙を拭くのも忘れて、私は、小さなテーブル越しのお父さんを、黙って見つめていた。

「だからな、三菜。あの鉄道事故の後、お前が一花の振りをしてたときは、父さん泣きそうだったぞ。お前は三菜だ。一花や二葉の真似をする必要はないんだ。

父さんは、母さんの生まれ変わりの三菜がいればいいんだ」

私は、生まれて初めて、声を上げて泣いた気がする。

しかもうれし泣きだ。

お父さんは、大泣きする私の頭を、優しくなでてくれた。もちろん、笑顔のままだった。

その後のことは、よく覚えていない。

### 第三章 三菜の日記 六月十二日(日)

今日も一日中、お父さんと一緒だった。

朝ごはんと一緒に食べて、お昼も一緒に食べて、夕ごはんも一緒に食べた。お父さんは、どれもおいしそうに食べてくれた。一花お姉ちゃんに化けていたときの、料理の練習が役に立った。

今日の日記は、お父さんとの思い出と、言ってもほんの一週間前( )を書くことにする。

好きなことが書けるのが、日記のよいところだ。もちろん、本当の私が書いたこの日記は、お父さんにも見せるつもりは無い。恥ずかしいから。

私が、二葉お姉ちゃんを階段から蹴り落とした日、お父さんに下着を見られたときのことだ。要は、『二葉の日記』の最終日の続きだ。

「下着見えてるぞ、三菜」

そう言われて、私は、急いで上げていた足を引っ込めて、スカートを押さえた。

お父さんは、少し照れたように笑っていた。

スーツ姿のお父さんの足元には、血まみれの二葉お姉ちゃんが転がっていた。

私は、「三菜」と呼ばれたことに気づくのに、しばらく時間がかかった。

お父さんは、最初から判っていたのだ。

私がつろたえて、ムダにスカートを押さえたまま黙っていると、お父さんは、今日の夕食のメニューを聞くくらい何でも無いことのように、私に聞いた。

「今回はどうするんだ？ 二葉に変わるのか？」

私は答えられなかった。

「それとも、一花のままか？」

私は、答えた。許されるのか不安だったが、その時私は、確かに本心から言った。

「……三葉じゃ……だめ？……」

お父さんは、笑ってうなずいてくれた。

こんなお父さんだったからこそ、私は昨日、お父さんに二つの日記を見せる決心がついたのだ。そのおかげで、お父さんの心も知ることができた。

三つ子の姉妹が私一人になってから、私の心は、良いほうに動いている気がする。

相変わらず友達はいないけど、お父さんがいる。善良な一花お姉ちゃんと二葉お姉ちゃんには悪いことをしたが、私は私の人生を楽しませてもらうことにする。

戸籍上の名前は一花だが、私は三葉。

お父さんの一番愛する人の生まれ変わり。

私は今、幸せだ。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0075d/>

---

犯行予告日記

2009年3月24日08時46分発行